

高校音楽Ⅱにおける鑑賞教育について

米 田 閏 一

鑑賞教育における問題点

音楽に限らず鑑賞教育において最も重要なことは、その教材がどのような形で生徒たちに受け入れられるかということである。鑑賞する作品によってはただ一方的に鑑賞させるだけでもかなりの効果が生じるものもある反面、鑑賞させたい教材について事前にあらゆる角度からの指導が加えられないと鑑賞する本来の目的が達成されないという教材がほとんどである。さらに数限りない鑑賞教材の中から効果的な作品を選択し、その教材をより効果的に配列するなど、さらには時間的な問題や予算的な問題等種々の問題がからんでくる。音楽教育の上においてもこの鑑賞教育たるものはかなり大きな比重を占めているので、音楽史の急速な流れに取り残されないよういろんな角度から幅広い音楽を吸収しなければならない。

古典派以前の音楽………グレゴリオ聖歌

まず音楽Ⅱにおいてはかなり幅広い視野において教

材の選択を考えられるということ、これはのずと広範囲でバラエティーに富んだ構成が考えられる。このことは音楽Ⅱにおける一つの大きな飛躍でもあろう。いうまでもなく音楽Ⅰにおいてかなり広範囲にわたっての基礎的知識、楽典、楽式の修得も了し、情操的にも身体的にも多大な進歩と調和を有して来たことが鑑賞能力を一段と大きくしたといえる。しかしながら音楽Ⅱにおいて鑑賞の占める時間的な割合というものは極く限られた時間であるので、鑑賞教材の選択ということが非常に重要なポイントになる。

まず基本線としては音楽史の流れに乗って、その作品の音楽史的背景というものを理解し、あわせて文化的側面もその作品の興味づけにとり上げることは忘れることができない。それでは具体的な問題にして音楽史の流れに乗ってグレゴリオ聖歌を鑑賞教材としてとり上げる時、事前の指導として、音楽史の上でのこの音楽のもつ意義や、重要性、以後の音楽へおよぼす力などを理解させ、意外と我々の日常生活に密接し

<p>バッハ 1685 ~ 1750</p> <p>内向的 一生ドイツにいた</p> <p>代々音楽家の家系</p> <p>生まれながらにして音楽家</p> <p>多産型 (20人の子供)</p> <p>冒険的生活を好まなかった</p> <p>地味な性格</p> <p>教会の中において大部分を作曲</p> <p>(教会カンタータ, オルガン曲)</p> <p>オルガン等を中心とした</p> <p>器楽においてすぐれていた</p> <p>(器乐的作曲家, 特にオルガン)</p>	<p>ヘンデル 1685 ~ 1759</p> <p>外向的 イタリア→イギリス (死亡)</p> <p>音楽家として教育されなかった</p> <p>法律学を勉強</p> <p>独身, 家庭的な事を軽蔑した</p> <p>社交家</p> <p>♪自分は冒険者だ、</p> <p>劇場の中に於て作曲</p> <p>オペラのごときで、声楽においてすぐれていた</p> <p>(声乐的作曲家, 特に合唱)</p>
<p>〔共通性〕</p> <p>(イ) 2人共バロック的性格</p> <p>(ロ) 楽天的</p> <p>(ハ) 厳格で勤勉家</p> <p>(ニ) 意志力が強靱</p> <p>(ホ) 盲目になった</p>	

た音楽であることを認識させる必要がある。とにかくこのグレゴリオ聖歌はながいながい音楽の歴史のなかで現存する青楽の核である。グレゴリオ聖歌は音楽の本来の姿である、飾り気のない本当に純粋に、旋律だけの、単旋律の音楽で、別名单旋律聖歌ともいう10世紀以上の後のバッハの音楽もベートーヴェンの音楽もさらに何百年後になった現代の音楽も根本的にはグレゴリオ聖歌となんらかわかっていないのである。ただグレゴリオ聖歌に美しい着物をつけ洗練された美しい化粧をほどこしただけである。崇高さにおいてはグレゴリオ聖歌以下の音楽もぎらである。とにかく現在でも立派に歌いつがれている音楽であるし、これからも人間がロボット化しない以上生きつづける音楽である。このグレゴリオ聖歌は単旋律の極く原始的な音楽ではあるけれど、いかに美しい音の積み重ねによる和音よりも、素晴らしい響きがする。

バロック音楽

音楽史の上で極めて重要な存在を成し、かつまたすぐれた作品も数多く有って鑑賞教材として短時間で消化し難いのがJ. S. バッハである。そこでJ. S. バッハだけに固執している教材に対する指導があらゆる興味で硬直化を来たすので、J. S. バッハと対比させる意味で同じ年に生まれたヘンデルを並行させると非常に興味深い。

後記の表にも明記したようにJ. S. バッハは器楽曲を取り上げ、ヘンデルはオラトリオの中の合唱を選曲するのが順当であろう。J. S. バッハの音楽の真髄であるオルガン音楽で「トッカータとフーガ」二短調の曲はある意味で非常にポピュラーになっているので馴染みやすい作品である。他に彼の完成したフーガの作品についてはオリジナル作品でとり上げるのはもちろんのこと、最近ではシンフォニック・バンド等にアレンジしたものが音色の変化があって形式を理解しやすいし、一方ジャズの音楽面でかなり高度にバッハとフーガと四つに組んだ演奏が有るので比較対照する興味深い。一方ヘンデルについてはメサイアや俗に「優勝讃歌」と呼ばれているオラトリオ「ユダス・マカベウス」の合唱に代表されるようにすぐれた合唱曲が数多い。

ロマン派の音楽

音楽史を基本にした流れの中で、最も人間の感覚と合致する音楽はベートーヴェン以後のロマン派の作曲家たちの作品であることはいままでもないことである。それ故に必然的にロマン派の作品に集中する結果になるし、鑑賞教材としてもふさわしい作品が多く指導の面においても充分行きわたると思われる。なかで

もベートーヴェンの音楽は音楽Ⅱにおける鑑賞教育において中心的教材となる素材を多く有している。ロマン派の作品全般について言えることであるが、殊にベートーヴェンの音楽は演奏者とか指揮者それに聞き手によって解釈の仕方がかなり違ってくるので、一定の演奏だけではなく幅の広い鑑賞形態が時間の許す限り採択する必要がある。ベートーヴェンの音楽的、精神的な面の変遷を理解するには、格好の作品であるピアノ・ソナタやシンフォニーが有るが、指導が徹底し、効率が良いという面では、色では、色彩的なシンフォニーが適当であろう。さらにベートーヴェンのシンフォニーをより深く理解させるためには、彼の生活的側面やら精神的側面を把握しなければならないし、楽式論的側面も附言する必要があるという受動的指導と並行して、各々が管弦楽総譜を読譜しながら鑑賞するという主体的な鑑賞の方法も考慮する必要がある。管弦楽総譜を読譜しながら鑑賞する場合その具体的な方策としてシンフォニーという長大な曲の中でも非常に一般的でしかも内容的に大変充実し、かつまた楽曲構成が簡潔なシンフォニーNo. 5 ハ短調作品67の管弦楽総譜を出来ることなら各自一冊づつ貸与できるように効当部数を取り揃えておく。このシンフォニーは他のあらゆるシンフォニーに比較して、モチーフの構成が有機的で、かつまた数理的であるので、管弦楽総譜に対する読解能力の訓練が皆無でも十分音楽の流れを読みとっていくことができる。その上ベートーヴェンが極限にまで完成させたソナタ形式が極めて理路整然とまるでち密で神秘的な細胞組織を見るかのごとく明確に把握することができるのであかかも管弦楽総譜をはじめ勉強する初心者のために作られた作品のようでもある。

しかも、上記の楽譜で見ると冒頭の5小節、いわゆる余りにも有名なあの運命の動機は、演奏を聞く限りでは認識しえなかった事実が気がつく。それはオーケストラ（管楽器、打楽器、弦楽器）の全合奏による力強い運命の動機の提示ではなくて、なんとベートーヴェンが我々に呼びかけている運命の動機は弦楽器とB♭クラリネットだけにゆだねているということである。他の楽器を何故休ませたのだろうか。非常に興味深い。その他ベートーヴェンのシンフォニーの中では非常に躍動的でことのほか開放的なのが第八番である。これは第二楽章に彼がメトロノームを発明したメルツェルさんを祝福して贈ったカノンが主題づけられているので以外と親しみやすい作品になる。簡単でリズムミカルなカノンなので鑑賞の途中の気分転換には好材料である。

SYMPHONY No. 5 (in C-minor)

第五交響曲 ハ短調『運命』

I (第一楽章)

L. van Beethoven, Op. 67

Allegro con brio (♩=108) (1770-1827)

2 Flutes

2 Oboes

2 Clarinets in B

2 Bassoons

2 Horns in E

2 Trumpets in C

Timpani in C.G

Violin I

Violin II

Viola

Violoncello

Double Bass

10

メトロノーム発明者メルツェルに (四声)

岡本敏明 作詞
Beethoven 作曲

♩=84

I
タタタタタタタタタタタタタタ - わ-れ-ら-の-メルツェル

II
タタタタタタタタ タ こん に ちは

III
タタタタタタタタ タ 拍子のかみ さまよ タタタタ

IV
タタタタタタタタ ばんざいメトロノーム ばんばんざいタタタタ